

# コミュニケーション能力育成のための 中等教育における外国語教育の考察と実践

## その① -アクション・リサーチと授業観察...授業見学に向けて-

慶應義塾大学総合政策学部 2年 遠藤 忍  
s07154se@sfc.keio.ac.jp

### 本レポートの要約

本レポートでは、コミュニケーション能力の育成を目標とした外国語教育における「会話」活動に関する研究を行う上で有効な、アクション・リサーチと授業観察という手法について紹介する。そして、その手法に関する知見を活かして制作した、授業見学に用いる観察シートやアンケート用紙について、その制作意図を解説する。

### キーワード

外国語教育、アクション・リサーチ、授業観察、授業見学、英語、中等教育、コミュニケーション

# 0. 目 次

<b>1. 研究デザイン</b>	<b>3</b>
1.1 研究の目的	
1.2 研究の背景	
1.2.1 コミュニケーションの変化	
1.2.2 インタラクティブ・フォーラムの問題点	
1.3 研究の対象・サイクル	
1.4 研究の観点	
1.5 研究の手法	
1.6 本レポートの位置づけ	
<b>2. アクション・リサーチと授業観察</b>	<b>6</b>
2.1 アクション・リサーチとは	
2.1.1 定義	
2.1.2 3つの目的	
2.1.3 調査のプロセス	
2.1.4 調査資料	
2.2 授業観察とは	
2.2.1 定義と目的	
2.2.2 研究手法	
2.2.3 留意点	
2.3 アクション・リサーチと授業観察の関連	
<b>3. 授業見学のための準備</b>	<b>11</b>
3.1 動機・目的	
3.2 見学における観点	
3.3 調査手法	
3.4 調査の5つのフェーズ：利用する資料	
3.4.1 授業見学前（事前準備・理解）	
3.4.2 授業見学中（授業観察）：p.22とp.23を参照	
3.4.3 授業終了直後（インタビュー）：p.24を参照	
3.4.4 授業見学後（事後調査と整理）	
3.4.5 授業見学のしばらく後（追跡調査）：p.29を参照	
3.5 授業見学の予定・問題点	
<b>4. 終わりに</b>	<b>17</b>
<b>制作資料</b>	<b>18</b>
<b>参考文献</b>	<b>30</b>

# 1. 研究デザイン

この章では、学部在学中の研究テーマ：「コミュニケーション能力育成のための中等教育における外国語教育の考察と実践」について、研究を行う目的とその背景にあるコミュニケーション能力と社会問題との関連性について意見を述べる。そして、研究の中で着目したい観点（仮説）と研究の大まかな手法について述べる。最後に、在学中の大きな研究テーマのなかで、今回の最終レポートが研究テーマの構想と次学期以降にむけた準備という位置づけであることを述べる。

## 1.1 研究の目的

本研究では、外国語の4技能のうち『会話；話す』に重点を置いた教科教育活動・学校課外活動を考察・および筆者自身が実践を行う。このことで、中等教育（中学校・高等学校）に属する生徒たちのコミュニケーション(目の前の相手に何かを伝え、相手から何かを知ろうとする行為<sup>1)</sup>)の能力を向上させる最適な指導方法について考察をするものである。

茨城県で実施されている英語インタラクティブ・フォーラムを実践・考察の現場の中心とし、これに向けた生徒（学習者）への効果的なアクティビティの方法や当該教育活動の在り方について筆者なりの見解・提言を提示することが研究の第一目標である。

また、『「(外国語に限らない)コミュニケーション能力の育成」を中等教育における外国語教育の中心目標とすべき<sup>2)</sup>』という筆者自身の主張を発展させることも目標の一つである。

## 1.2 研究の背景

本研究を行う動機の背景には、筆者自身の抱く2つの問題意識がある。ひとつは、社会における人々のコミュニケーションの変化である。もう一つは、フィールドの中心である英語インタラクティブ・フォーラムそれ自体である。

### 1.2.1 コミュニケーションの変化

キレル若者、引きこもり、いじめ、殺傷事件のような凶悪犯罪など、青少年を取り巻く問題が近年急増している陽に感じる。事実、突発的な通り魔事件や、中学生によるバスジャック・肉親の殺害など、凶悪犯罪のニュースがあとを絶たない。

筆者は、こうした社会問題の背景に人々のコミュニケーション様式の変化があるのではないかと考える。インターネットや携帯電話の普及によって、文字を介したコミュニケーションが多くなり、また生活スタイルの変化から家族内や地域、学校や会社などでの、対面・対人のコミュニケーションの機会が減っているように思う。筆者はこうした「変化」が様々な社会問題の原因であると考えている。

とくに、学校現場における引きこもりやいじめの問題は、7・80年代の「非行」とは違う様相を呈しており<sup>3)</sup>、友人どうしや教師と生徒などの人間関係をうまく構築することができなくなっているように思う<sup>4)</sup>。筆者は、これを会話コミュニケーションの機会あるいは相手の伝えたいことを正しく受け取るという意味でのコミュニケーション能力が低下してきたからではないかと思う。そして、そうした低下し

1 これは筆者の定義であり、筆者は本レポートにおいて「コミュニケーション」をこの意味で用いる。

2 文部科学省が平成11年に施行した中学校学習指導要領の外国語の節では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」を目標と定めている。

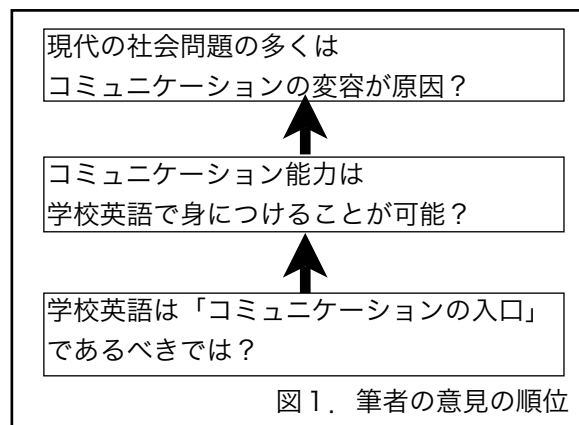
3 このことについて、佐野は教育評論家の村山士郎氏を引用している（佐野：2000）。

4 一例として、2004年6月の長崎県佐世保市の小学6年生どうしの殺傷事件が挙げられる。

た機会や能力は、学校という場で提供することができる、そしてそれを担う教科が、英語であるということを筆者は感じた。

そこで筆者は、学校・特に中等教育(中学校・高等学校)における英語学習(教科学習)を「English as a Gateway for Communication(コミュニケーションの入口のための英語)」と捉え、「母語による日常のコミュニケーションにも通ずる素養を身につける」ことを第一の教育目標とするべき、との意見を持つようになった。

本研究では、図1に示す一番下の部分を一種の仮説とし、これを証明することで上位層の事象についての提言を行う目標を持つ。



### 1.2.2 インタラクティブ・フォーラムの問題点

筆者が中学生時代に出場を経験した茨城県の英語インタラクティブ・フォーラムは、英語のみを用いた会話(雑談)を通じて、広くコミュニケーション能力を競うコンテストである。ここでは、個人の英語の力よりも、グループでの会話の進め方に対して審査のウエイトが大きく、あいづちや質問、他者の意見の吸収など、相手との相互作用(=interaction)が重視される。

それだけに、このコンテストは前述の筆者の考える英語教育目標を実現しうる教育活動であり、教育活動の斬新さや教育効果の面から見ても興味深い取り組みである。

しかし、始まってから10年以上立つ取り組みでありながら、審査基準は客観的とは言えない<sup>5</sup>、また明確な指導法が存在する訳ではない、という問題点がある。

特に指導においては、ひたすら表現を身につけ、それを英会話の実践の中でアウトプットするしかない状況である。代表として出場する生徒は、必然的にすでに英語が得意・あるいは成績上位の者か、すでに「積極的」とされる者に限ってセレクションされる傾向がある<sup>6</sup>。そして各学校での練習では、毎回のように同じ「代表」とばかり会話をするので、代表生徒が飽きてしまう傾向も強い。

以上のような点において、現場の教師のなかにはこの活動の指導方法に困ってしまう者もいるという。それ以前に、ただでさえ多忙な教師が、部活動ではない課外活動であるインタラクティブ・フォーラムに時間を割くことができない現実も存在する。

以上のような指導における問題点や大会それ自体の改善点を、筆者自身がかつての出場者・かつ指導補助者として考察・実践を行うなかで、提言としてまとめることを本研究の目標としている。

### 1.3 研究の対象・サイクル

繰り返しであるが、本研究では外国語の『会話；話す』に重点を置いた教科教育活動・学校課外活動を中心に考察を行う。またその考察を実践に応用しながら反省的考察を行うというプロセスを踏む。したがって、本研究における研究対象は、外国語の教室授業やグループで行われる課外活動等となる。

すでに1.1や1.2で述べている通り、研究対象の中心は英語インタラクティブ・フォーラムであり、母校その他における指導実践とその反省的考察が中心となる。この活動は、インタラクティブ・フォーラムの大会日程の関係上、毎年4～8月が中心となる。

<sup>5</sup> 具体的な審査観点については第4章で述べる

<sup>6</sup> これはあくまで筆者の主観ではあるが、現に筆者が指導した中学校の選出基準は英語の成績が主である。また筆者が見学した大会に「積極的」とみれる生徒がいたが、彼の学校の教員曰く、彼を代表としたのは「積極的だから」であった。

これ以外の時期では、会話学習を中心とした外国語の授業を見学し、考察研究を行いたいと考える。授業の考察をすることで、会話コミュニケーション指導の方法についての見解を得ることができ、その見解を実践活動に活かすことができると考える。

## 1.4 研究の観点

本研究における着眼点は、3つである。

まずは、会話コミュニケーションの習得を主たる目標とした外国語の授業・活動である。なかでも一番注目したいのは、授業中に行うアクティビティである。知りたいのは、生徒(学習者)が能動的・主体的に参加する活動の方法そのものであり、教材や教員の解説法に対するウエイトは高い訳ではない。

次に、前述の観点から発展して、その方法が学習者の意識・態度にどのような影響を及ぼすか、も着眼点として挙げられる。ここでいう意識・態度とは、外国語に対する意識よりも、コミュニケーションをしようとする意識・態度をさすものである。

最後に、当該方法を行う・または学習者の意識・態度を促進するにあたって、教師(指導者)はどのような立場を取るべきか、というものである。つまり、教師がどのような振る舞いをし、またどのような発言をしているのかを観点とする。この観点は、とくに授業見学のなかで重視する点である。

## 1.5 研究の手法

研究は、先ほど1.3で述べた通り、インタラクティブ・フォーラムの活動実践と外国語の授業見学から成り立つ。その双方で、以下に述べる研究手法をとる。

授業実践の大きな目的は、効果的なアクティビティ・授業指導、展開の方法を提言することである。したがって、実際に筆者自身が実践活動を行い、そこから知見を得ることが必要となる。そのためには、自身の実践活動を反省的に考察する必要がある。そこで実践活動の研究においてはアクション・リサーチによる授業研究の方法を利用することとする。

一方の授業見学の目的は、授業・活動の考察を通じて実践活動に活かすことのできる知見を得ることである。従って、ただ授業を見るのではなく、系統立てた方法を利用して考察をする必要がある。よって、授業見学における研究では、授業観察の手法を応用して考察を行う。

## 1.6 本レポートの位置づけ

本レポートの一番の目的は、来学期の授業見学活動で用いる観察シートやアンケートの作成について述べることである。

しかし、無計画にこれらの資料を作るのではなく、あらかじめ利用しようと考えている手法を活かして作られるべきである。そこで、アクション・リサーチと授業観察の方法について調べた事項をまとめるという役割も持っている。

本レポートは、研究の構想発表でありながら、在学中の研究の流れにおける初歩・導入の段階であり、今年の夏・そして来年の指導にへの準備段階といえる。。

## 2. アクション・リサーチと授業観察

この章では、研究手法として第1章で挙げたアクション・リサーチと授業観察の方法について、その定義・目的・調査方法／プロセスに関して特徴を述べ、研究手法としては両者が非常に密接に関連していることにも触れる。

### 2.1 アクション・リサーチとは

この節では、アクション・リサーチを利用した授業研究の方法について、大まかに取り上げる。なお、アクション・リサーチは教育学だけでなく社会学の場面でも利用されているが(佐野：2000)、今回このレポートでは外国語授業研究の文脈で話を進める。

#### 2.1.1 定義

佐野は、英語教育アクション・リサーチを「教師が授業を進めながら、生徒の力も借りて実践を反省し、改良していく継続的な授業研究(佐野：2000)」と定義している。すなわち、アクション・リサーチは授業の反省と改善のプロセスを体系化したものであると捉えることができる。「リサーチ」と名がつくだけあって、調査研究の手法であるから、もちろん適切な資料の収集をしたうえで仮説と検証を行うプロセスである。この点が、「良心的な教師なら、実は誰もが無意識のうちに実施している(佐野：2000)」授業改善プロセスとは違うものであると言える。

#### 2.1.2 3つの目的

佐野によれば、アクション・リサーチを行う目的には大きくわけて3つの立場が存在するという(佐野：2000)。

- ・自分の授業を改善しようとする立場

自分が実施している授業をより良い者に改善して行こうとする教師がこれに該当する。自分が直面している授業における問題を解決する方法として捉えられる。主たる目的はこれである。

- ・教育の改革に反映させようとする立場

アクション・リサーチをグループで行い、カリキュラムや評価、学校運営などに対して結果を反映して行こう・提言をしようとする立場がこれに当たる。特に1970年代後半のイギリス<sup>7</sup>でこの動きが盛んになった。

- ・理論に基づく実践の仮説を検証する立場

応用言語学や第二言語習得理論に基づいた指導法を実際に教室内で試し、効果を理解することによってこれらの研究分野の発展に寄与しようとする立場である。「他の分野では科学であっても実践で確認されなければ教育上の科学でない(佐野：2000)」という立場がこれに当たる。

佐野は、この3つの立場はそれぞれが独立した立場ではなく、密接に関わっていることが多く考えられる、と指摘している。その指摘通り、私の研究目的は上記の3つの立場を包括するものであることはいうまでもない。

---

<sup>7</sup> 当時のイギリスでは、『教育への政府不介入』の立場を取っていたイギリス政府が方針を変えたことで、88年にはThe National Curriculum(=日本でいう学習指導要領)が策定された(佐野：2000)。

### 2.1.3 調査のプロセス

アクション・リサーチの活動は、1回限りで終わるものではなく、1回のサイクルを何度も繰り返しながら設定した目標の到達を目指す者である。Nunanはアクション・リサーチの1回のサイクルを6つの段階に分けている(佐野：2000)。

- ①問題の確定 : 自分の抱えている問題をしぼる
- ②予備的調査 : 絞り込んだ問題点について、アンケートや授業の観察などで教室の実体を調査する
- ③仮説の設定 : 教室の実態に即して実現・達成可能な到達目標を定め、指導計画を練る
- ④計画の実践 : 仮説(到達目標)の解決のためのトリートメント(計画)を実施し、その記録を取る
- ⑤結果の検証 : 観察記録やアンケートなど各種資料を参照しながら仮説の検証を行う
- ⑥報告 : リサーチの結果を報告の形にまとめ共有を図る。

以上6つのプロセスを繰り返す行うことで、問題の解決を図っていく。ちなみに、連続するサイクルにおいては、⑥を経ずに①に戻るケースも考えられる。

### 2.1.4 調査資料

定義からも目的からも、アクション・リサーチは、現場の(特定の)教室を研究の対象としているということが分かる<sup>8</sup>。授業というのは個々の教師・生徒によって異なる展開がなされるものであり、教師(たち)は、自身が直面する特定特有の状況・問題の解決を図ろうとする。つまり、研究結果の「一般論として妥当性はさしあたりは問題にしない(佐野：2000)」のである。

よって、アクション・リサーチでは、応用言語学や第二言語習得研究とは異なり、数量的資料だけでなく質的資料も取り扱うことができる。むしろ後者の割合を高めた方が、「複雑な要因を孕む個別の教室での調査の妥当性を高め」ることができる(佐野：2000)。

アクション・リサーチでの資料として、佐野は例を挙げている(佐野：2000)。主なものは以下。

#### 2.1.4.1 観察による収集：質的（教師の主観によって教室の出来事を記録していく資料）

##### ・フィールドノート（授業記録）

日時、クラス、授業内容の概略、授業中に起こった出来事をノートに取る。形式は自由だが、指導計画の紙の余白に記録を取って行っても問題ない。主観と客観は分けて記述する。

##### ・タイムログ

授業記録をグラフ化したもの。たとえばクラスの盛り上がり度を5段階に分けて、教師の主観によってそれを記録し、最後に視覚化するという方法もある。

##### ・観察シート

あらかじめ生徒の(予想される)発言を分類しておき、表にする。それを授業中にカウントして行く。あるいは、目標に達したと思われる行動をカウントする。質的かつ量的調査である。

##### ・日記／ジャーナル

授業終了後に、教師が授業の感想を書き記したものが日記である。あくまでメモ書き程度の感想を、きちんとした文章表現にまとめたものがジャーナルであり、日記を読み振り返りながら記録をする。

<sup>8</sup> 定義は2.1.1、目的は2.1.2を参照。

#### 2.1.4.2 言葉による収集：質的（生徒自身の(主観的な)言葉によって収集する資料)

##### ・アンケート

生徒に対して一斉に調査をすることができる。無記名・平易・目的の明確化が必須条件。英語での質問をすることで調査と言語活動の双方を果たすことも可能。

##### ・インタビュー

アンケートより深い内容を調査することが可能である。質問する内容と順序を決めておく方法(構造化インタビュー)、質問のポイントは決めておくがそれ以外は制約しない方法(半構造化インタビュー)、質問のテーマだけ決めておいて全て自由に行う方法(非構造化インタビュー)がある。また、授業後のちょっとしたタイミングでのインフォーマル・インタビューも有効である。

##### ・学習者の自己報告・評価

活動の難易、何が難しかったか／易しかったか、どのような支援が欲しいか、など活動に関する無記名アンケートを通じて生徒に活動の報告をさせる。成績等についても自己評価をさせることで学習の進捗や不安・要望をモニターすることができる。

##### ・生徒の成果物

活動で使用したワークシートや宿題、テストの成績や解答なども、学習の進み具合を図るのに効果的な資料として役に立つ。

主に質的資料について紹介したが、アクション・リサーチは数量的資料を無視・軽視をしていないということについても触れておきたい。むしろ、数量的資料の存在は、研究の客観性・信頼性を高めることとなる。したがって、前述のテストにおける成績や後述の相互作用分析的<sup>9</sup>な数値化・グラフ化も受容されうる。

## 2.2 授業観察とは

この節では、授業観察の方法について説明をする。なお『授業観察』は、ここでは学問的な分析方法の文脈で話を進める。

### 2.2.1 定義と目的

外国語教育学大辞典によれば、授業観察とは「教室内でのできごとを体系的に観察し記録する試み」である(ジョンソン：1999)。つまり、実際に行われる授業を観察するだけでなく、記録に残すことが授業観察である。観察を行う者は教壇に立っている教師かもしれないし、あるいは第三者的立場の者かもしれない。定義上は客観的になるということは求められないようである。

授業観察は、かねてから学習者の行動／教師の行動について、あるいは実践と効果の因果関係の分析に用いられて来た。近年では、学問的見地のみならず、教師の経験に由来する知識に対しても理解が得られるようになってきたため、その理解を深める効果を発揮するようになっている。

森田が実施したドイツ語の授業見学に関するアンケートで「他の人の授業を見ることは自分を見る鏡になる」という回答があったという点からも、「『授業見学』は自分自身の授業を相対化し、改善するための一手段」であることが分かる(森田：2004)。

<sup>9</sup> ただし、相互作用分析的な資料収集は多くの手間がかかるためアクション・リサーチには向かないこともある。詳しくは、2.2.2にて述べる。



## 2.2.2 研究手法

授業観察の研究手法として、中森は相互作用分析と参加観察法の2つの方法を挙げている(中森：2000)。

### 2.2.2.1 相互作用分析

相互作用分析は、教師と学習者の発話量や機能、種類を分析するための手法で、ある種類の発言の出現率を割り出す分析方法である。種類・機能の分類にはいくつかあるが、ここではFLintについて述べる。FLintは、モスコウィッツによって提唱された『良い英語科授業』が成り立つ12の要素<sup>10</sup>のカテゴリである(中森：2000)。

具体的な分析方法は、授業にあたって、それらの要素を縦軸に、時間を横軸に取ったマス目の表を事前に用意しておき、授業中は3秒ないし5秒に1回、どのカテゴリの発言があったかを記録に残す。そして終了後にこれをグラフ化する。

しかし、相互作用分析は、①FLintなどのカテゴリーが本当に『良い授業』の指標なのか、つまりカテゴリーの妥当性について疑問が残る点(中森：2000) ②そもそも数値化する作業には録音・録画、文字起こし、チェックという作業、または授業中に3秒に1回のペースで記録する作業のそれぞれが煩雑であるというデメリットが存在する。

### 2.2.2.2 参加観察法

参加観察法は、実際に授業に参加して、観察したことや特徴を記述する方法であり、ありのままに・自由に記述することができる。この点で相互作用分析とは異なる。

しかし、突然教室に飛び込んでの記述には熟練を必要とする。また、漠然とした感想の表明に終始しやすい点もある(中森：2000)。

上記の2つの分析方法は確立された分析方法であるが、結局のところ筆者は分析の方法を3つに分類した。

- ① モデル化された表を埋め、それをグラフ化する
- ② 録音／録画のあと、それを文字起こしして分析する
- ③ 教室の中で気付いたことをメモして行く

これらが授業観察の大きな分析手法であると言える。

## 2.2.3 留意点

授業観察では、学習者の行動や教員の行動についての分析、あるいは授業内活動の方法を知るという点で効果の高い方法である。しかしながらその限界もあることに注意せねばならない。この節では、授業見学・授業観察を行う上で留意せねばならない点を3つ挙げる。

### 2.2.3.1 可視行動の観察では全体を把握できない

目に見える学習活動だけが学習者が行う活動ではない。しかしながら、教室で観察が可能なのは目に見える学習活動のみに限られてしまう。外国語教育学大辞典では、「定義上、観察可能な目に見える行動を対象とするが、たいていの学習過程は目には見えない」と説明している(ジョンソン：1999)。よって、その他の手法を利用した学習者の分析が必要となる。

<sup>10</sup> 12の要素は大きく6つに分けることができ、それぞれ「教師の応答」「教師の指導」「学習者の発言」「沈黙」「混乱」「歓喜の表現」である(中森：2000)。

### 2.2.3.2 不定期・単発の授業観察の限界

森田は、「もともと授業というのは一学期、あるいは一年という長い期間の中で設計されているものであるから、ひとコマ90分を見て得た観察結果をその授業の全体像にまで拡大解釈することは危険である」としている(森田：2004)。とくに学習者の変容や授業内活動の位置づけなどを知ろうとする場合は、定期的・数回の授業観察が求められるが、制約がある場合は他の方法を考える必要がある。

### 2.2.3.3 第三者が授業観察をすると、教室に影響が出る

更に森田は、「見学者・観察者の存在がそれを受け入れる教師や学習者に、そして結果としてその日の授業全体にプラスに、あるいはマイナスに影響する可能性がある」と指摘している。つまり、観察者が第三者である場合、教室環境が通常と異質な空間となりうるため、学習者や教師が過度に緊張してパフォーマンスを落とす、あるいは向上させるということがあり得る。

授業観察を行う上では以上の点に留意して、かつこれらの留意点を補える別の方法についても考えなければならない。

## 2.3 アクション・リサーチと授業観察の関連

以上、アクション・リサーチと授業観察について見て来たが、両者は全く違うものではなく、むしろ非常に似ている手法であることが分かる。

外国語教育大辞典においても、「アクション・リサーチの基礎として授業観察を利用することをすすめている」と述べられている(ジョンソン：1999)。つまり、授業観察はアクション・リサーチの一部であるという視点がある。

一方で、アクション・リサーチで使用する資料は授業観察と併用することによって、より正確に学習者・教師の行動を理解することが可能になることも前節の通りである。

さしあたって今後授業見学を行う際も、またはインタラクティブ・フォーラムでの実践活動に当たっても、アクション・リサーチと授業観察とを分け隔てることなく双方の手法を利用して研究を行うことができる。

### 3. 授業見学のための準備

この章では、来学期に実施を予定している授業見学について、その目的や観点を明確化させたうえで、見学時に利用する授業観察のための資料やインタビュー・アンケート用紙を解説する。また、今後の予定や想定される問題点についても述べる。

#### 3.1 動機・目的

既出事項ではあるが、もう一度授業見学の動機と目的を整理したい。

秋学期における授業見学の一番の目的は、来年春学期の実践活動に向け、その実践活動に活かすことのできる活動の方法・進め方・その効果、そして教師の立場と学習者の意識・態度の変化について考察をし、そこから得た知見を実践活動に反映させることである。

#### 3.2 見学における観点

上記の目的・動機に従って授業見学の際に着目したい観点を書き出してみることにする。大まかに分けると、授業そのもの・教師・生徒の3要素に分けることができる。

<授業>

- ・その授業ではどんなクティビティが行われているか（特徴）

<教師>

- ・教師は何を目標に授業を組み立てているか（意図）
- ・教師は授業をどのようにこすせいしているか（進行）
- ・教師はどのような発言をしているか（立場）
- ・教師は授業をどう振り返るか（反省）

<生徒>

- ・生徒はどのように活動に参加しているか（態度）
- ・生徒は授業／活動をどう思っているか（評価）
- ・生徒は外国語／コミュニケーションに対してどう思っているか（意識）
- ・生徒の意識はどのように変わっていったか（変化）

#### 3.3 調査手法

では、上記の観点に関して、どのように調査・資料収集を行うか、という課題が生じた。

授業観察については、前述の通り、相互作用分析的な手法と参加観察法的な手法が存在する。相互作用的手法であれば、カテゴライズされた表に従って発言を埋めていくため、上記リストの「立場」あるいは「態度」の分析には適していると思われる。

しかしながら、筆者の研究調査においては数値化する量的調査以上に質的調査が望ましいと考え、参加観察法的な手法を採用することとした。その理由を4つ挙げる。

第一に、相互作用分析を行うだけの時間がない。録音／録画の後に文字起こしをする余裕はなく、また授業中に5秒に一度表を埋めて行く作業はもったいないと感じている。

第二に、発言の量よりも発言の質・内容を知りたいからである。そもそも発言内容はカテゴライズできるものではないと考える。また、画一的な内容が語られることはあり得ないと考え、教師・生徒それぞれの発言の質にこだわってメモを取りたいと考えたのである。

第三に、教室全体を見るのではなく、教室の参加者一人ひとりに焦点を当てたいと考えたからである。つまり、教室全体を見回してどれだけの人が発言しているか、という量的なデータを見るのではなく、前述の通り、それぞれの発言の内容や変化、そしてその理由を知りたいと考えたからである。

第四に、可視な「できる・できない」以上に、各人の意識に着目をしたいからである。通常の分析の観点では、何かが「できた・できない」に着目することが多いが、筆者の研究においては、生徒の内面における変化を重視しており、客観的な指標ではこれをはかることが難しいため、主観的な手法を用いるのが適当と考えた。特に筆者の言う「コミュニケーション」は「できた・できない」の世界では語るができないものである。

上記の通り、資料収集・調査は質的な手法をとることとする。さて、その調査であるが、授業見学のプロセスは以下の流れで行うことを想定している。

- ・ 授業見学前：事前調査と事前理解
- ・ 授業見学中：授業観察
- ・ 授業見学直後：インタビュー
- ・ 授業見学後：事後調査と整理
- ・ 授業見学のしばらく後：報告と追跡調査

もちろん、授業見学に当たっては事前の打ち合わせ等を綿密に行う必要があることは否めない。しかし、研究・調査活動としては、上記の5つのフェーズで行うことが望ましいと考える。

### 3.4 調査の5つのフェーズ：利用する資料

では、上記の5つのフェーズの調査活動を更に細かく見てみることにする。なお、調査用の資料は、制作資料(p.)以降に掲載されているので参照されたい。

#### 3.4.1 授業見学前（事前準備・理解）

##### 3.4.1.1 教師への質問事項：p.19とp.20を参照

授業見学の前に、見学する授業がどのように展開される予定であるかを、あらかじめ知っておく必要がある。これを知っておくことで、必要な情報を記入しておき、見学中は気付いたことをメモする時間を多く取ることができるようにするためである。

資料の構成だが、まず行う活動(問1)、指導の中心となる言語内容(問2)を聞く。

活動は、主教材への準拠かあるいは独自教材・カリキュラムかで活動の扱いが異なる可能性がある。よって、カリキュラムのどこでこの活動を行うのかを知っておくべきと考えた(問3、4)。また、副教材を使用するかしないかでも活動に変化があると考え、重要な情報として設問に挙げた(問5)。

あらかじめ授業の構成を知っておくことによって、大まかな授業進行の見通しが立ち、何に対して注目すべきかが明らかになりやすいと考え、設問に挙げた(問6)。

この『対教師の』事前質問の中で最も重要なのが、教師の意図や達成目標を聞くことである。授業見学中にこの意図や目標が達成されているかを見学者が判断しやすくなり、また教師自身もインタビュー時に反省がしやすくなる。そこで、意図・目標を伺う設問を挙げた(問7)。

最後ではあるが、教室環境と生徒の人数構成は必要最低限の情報として加えた(問8、9)。

### 3.4.1.2 生徒へのプレアンケート：p.21を参照

今回の着眼点の大きなものに、生徒の意識とその変化を挙げている。とくに、見学する授業を含めた一連のカリキュラムが生徒たちに対してどのような影響を及ぼすのか、を考察するつもりである。この考察を行う上では、変化前の状況を知る必要がある。そこで、「プレ」としてアンケートを実施する方針とした。

資料についてであるが、記名を求めることはアンケートの原則<sup>11</sup>に反する可能性があるが、あえて記名式とした。これは、「生徒の授業前」「授業直後」「授業終了からしばらく後」のフェーズのそれぞれの変化を知るためのものである(問1)。

英語は好きか、という設問は非常に稚拙ではあるが、後の「楽しい」「つまらない」の記述を通して、なぜ好きか・なぜ嫌いかをメタ認知させる効果を狙った設問である(問2、3)。

英語の4技能に関する希望を聞いた理由は、①そのニーズと授業内の活動が合致しているかを調べる ②好きか嫌いかよりも目標意識のほうが、生徒のモチベーションを挙げやすいのではないかと考えた という二つの原因である(問4)。会話に関する設問は、その後の変化を見るための最初の調査という位置づけである(問5)。なお、5段階選択にすることによって、主観的データではありながら、数値化が可能であり、分析に役に立つと判断した。

### 3.4.2 授業見学中(授業観察)：p.22とp.23を参照

実際の授業観察においては、手元に常に授業観察シートを持って見学を行うこととなる。気がついた項目については適宜観察シートの所定の場所を書いていく。なお、ルールとして、観察者自身の感想やメモは黒いペン、教師の発話は赤いペン、生徒の発話は青いペンを使用することを定める。

実際の観察シートであるが、基本情報シートには観察対象の教室・授業について基本となる日時や場所、クラスサイズ、指導のポイントと授業構成を記入する。コミュニケーション教育においては、参加者の意識やモチベーションが活動に差を生んでしまうことが考えられる。整理の段階でこれを分析できるように、教室の配置<sup>12</sup>とクラスの雰囲気メモする。なお、基本情報シートのほとんどの項目は、事前準備における対教師の質問事項の回答を以て記入することが可能である。

授業中シートは、対教師の事前質問中にある大まかな概要に書かれたフェーズの分だけ紙を持って行く。つまり、活動の移り変わりで記入するシートを変えていく。活動内容は、事前に聞いている授業構成からあらかじめ記入は可能であるが、状況によって変化があり得る。

今回は方法の特徴も観点として挙げているため、活動の形態や具体的な活動の進め方を記入する欄を設けてある。ちなみに活動形態のカテゴリ<sup>13</sup>は筆者のこれまでの外国語教育の経験から考えたものであるが、もちろんこれに当てはまらない場合も想定している。

主観メモは、観察者が気がついたこと・主観的な気づきを黒いペンで記入していく欄である。一方の発言メモの欄は、基本的に赤(教師)と青(生徒)のみを使い、気になる発言を全て書き留めていく。

### 3.4.3 授業終了直後(インタビュー)：p.24を参照

授業終了後すぐに、授業を受けていた生徒に対してインタビューを行う。

<sup>11</sup> 2.1.4.2 参照。

<sup>12</sup> 教室の配置については、牛野の授業観察の手法を参考に導入した(牛野：2006)。

<sup>13</sup> すなわち、解説 - 個人作業 - ペアワーク - グループワーク - 全体共有 の5つである。

形式として、非構造化インタビューをとる。インタビューの質問は、大まかなテーマとして授業の感想・反省、外国語やコミュニケーションへの意識としておくが、個別の設問は作らない。インタビュー相手も、授業中に言動が(良い意味で)気になった生徒をピックアップするので、実際にその生徒を目の前にしなければ設問は浮かばないと判断し、非構造化インタビューを採用した。そのため、インタビューシートは4人分のメモ欄を性別以外はまっさらになっている。

なお記録に当たっては、ペンの色を分けるルールに従うものとする。

### 3.4.4 授業見学後（事後調査と整理）

#### 3.4.4.1 生徒用自己評価シート(アンケート)：p.25を参照

授業・活動を通じて生徒が何を達成することができたのか、生徒自身が授業をどう評価しているのか、という点についての意識を調査するために、アンケートという形をとった自己反省・評価シートを作成した。

資料についてであるが、記名をするのは前述の通り、変化を見るためである。楽しいこと・つまらないことの双方を書かせる、あるいはできたこと・できなかったことの双方を書かせることによって、建前上はアンケートであるが、学習活動に対するメタ認知を促す効果も期待できる(問2、3)。Open-Endedな設問を取り入れることで、回答者の負担は増えるであろうが、より多様な意見を吸収でき、授業の方法の考察にも役立てることが可能である。学んだことを記述する欄は、特に教師がたてた目標や意図とを比較することで、どれだけ教師の意図がその通りに伝わったかを見ることができると期待している(問題4)。同様のことが、選択式の4つの設問でもいえる(問5)。

#### 3.4.4.2 教師へのインタビュー：p.26とp.27を参照

授業は、必ずしも当初の見通しどおりに進むものではないはずである。教師自身にも毎回反省点があるはずであり、またその反省点を次の実践活動に活かそうと考えているはずである。このインタビューでは、教師の反省を促しながら、教師がたてた意図や目標を再確認するものである<sup>14</sup>。

インタビューの形式は半構造化インタビューを採用し、すなわちあらかじめ設問を決めておいて、時間や順序に関係なく意見を引き出す。今回は、聞いておきたい・押さえておきたい事項があるので、それはあらかじめ設問としたが、そこからはせいする反省・意見・見解も重要な研究要素といえる。基本的に教師の主観で回答してもらうことを心がける。

なおこちらでも、観察者は黒、教師は赤のペンで気付いたことをシートにメモを取る。

#### 3.4.4.3 授業見学の振り返り・整理：p.28を参照

見学時の感想や基本情報など、観察者本人が感じた・メモした事項を、ある程度記憶が残っているうちに分かりやすく整理する必要がある。そうでなければ、せっかくの授業見学で得られる知見を見逃してしまいかねないからである。

ところで、その方法であるが、基本的には観察者(=筆者)が記入した資料を読み返してジャーナルを書くのが望ましいと考える。したがって、明確な記入シートは用意をしない。

しかしながら、見学の日時や場所によっては、整理をする基準が曖昧になりかねない。そこで、記入シートは用意しないにせよ、統一的な整理・分析の手法として2つの考え方を採用することとする。

<sup>14</sup> 3.4.1.1 で、問7に意図や目標の話題を含めたのは、この事後インタビューにおける自己反省の一材料となるという考えが中心である。

### <マズローの三角形>

もともとは、「アメリカの社会心理学者のMaslowが」開発した「成人が自己実現を成し遂げるためのステップ」であり、英語教育についても当てはめることが可能である(佐野：2000)。

マズローの三角形では、生理的欲求を三角形の一番下のレイヤーとし、そこから安全への欲求、所属への欲求、尊敬への欲求、自己実現の欲求と積み重なっていく。佐野は、最上位の「自己実現の欲求」こそ英語で自分を表現する意欲であるとしている。欲求をもつ、すなわち英語で自分を表現するという欲求が生まれるには、下位層の4つがきちんと整っている必要がある。

見学後の整理作業では、以下のマズローの三角形による観点に従って、授業を振り返る。

- ・ 生理的欲求：物理的な教室環境、学習活動のメリハリ
- ・ 安全への欲求：教師の態度(威圧的?やさしい?)、個人のニーズへの対応、「分かる」授業
- ・ 所属への欲求：教室内の連帯感、個々の生徒に対する着目
- ・ 尊敬への欲求：加点法による評価

以上の4つの欲求を満たす環境・公正になっていたか、を整理の際に反映する。

### <COLT>

Allenらが開発した、相互作用分析におけるカテゴリの1種であり、正しくはCommunicative Orientation of Language Teachingという。モスクウィッツのFLintとは異なり、授業内容やコミュニケーション活動も分類・分析できるようになっており、訳読的授業か、コミュニケーション中心かをはっきり区別することができる。(中森：2000)。

COLTの分類は資料(p.28)に示す通りである。今回はあくまで感想を整理するためのカテゴリとして使用するため、各項目のなかで当てはまる項目に対して主観的な感想を当てはめていく整理方法が最も望ましい活用法と思われる。

これら2つの整理の基準が使えない(例えば時間的制約)場合は、3.2で示した観点にそって、感想を記述していくという方法も考えることができる。

### 3.4.5 授業見学のしばらく後(追跡調査)：p.29を参照

見学した授業の日からしばらく経過したとき、具体的には見学した授業の取り扱い単元が終了した時期を見計らって、追跡調査を行う。これは、授業観察の留意点でも示した、『単発の授業観察で全体像は見えない』という部分を補うための調査である。

筆者の観点では、生徒の意識の変化にたいしてもウエイトがかかっているため、見学した授業の効果を授業前・授業直後・しばらく後の3回で調査したいと考えている。

資料についてだが、まずは記名によって以前のデータとの比較ができるようにする(問1)。つづいて、単元を通じて何を学んだか、学ぶ前と後で変化したことはあるか、という自由記述の設問を載せることで、①教師の意図とのギャップの理解 ②記入者(=生徒)への学習効果のメタ認知の促進を狙う(問2、3)。最後の5段階回答の2問は、プレアンケートでも収集しているもので、この部分のデータ比較を行う(問4、5)。

### 3.5 授業見学の予定・問題点

さて、今後の授業見学の予定であるが、現在予定している授業見学先は以下の3つである。

- ・ S F Cドイツ語インテンシブ（観察シートの試用）
- ・ S F C中高
- ・ 埼玉県立不動岡高校

上記の見学先との連絡はこれからとる予定である。

では、ここで授業見学の当面の問題点について述べておきたい。

まず、受け入れ先が見つかるかどうか、である。学校現場にお邪魔して授業を見せていただくことになり、本来部外者である大学生は昨今の防犯の観点から難しいとされる可能性が高い。そもそも、自分の授業を公開することを快く思わない教師が多いと思われる。

つぎに、作成した資料について、アンケートによる質的調査が多くなった関係で、生徒や教師に対して負担がかかるだけでなく、筆者自身にも集計の負担がかかる可能性が高い。設問については、なお検討の余地がある。



## 4. 終わりに

今回のレポートを書くにあたっては、おもにアクション・リサーチと授業観察の方法について調査をした。当初はそれぞれが別の手法であると考えていたが、実は双方の調査方法はほぼ同じであることが理解できた。

研究デザインについても、何を研究していくか、目的や動機がはっきりしたことによって、次に起こす行動についても考えることができるようになった。

その分、今学期に取り組んだインタラクティブ・フォーラムの実践活動が今学期の成果としてレポート化できなかったことは残念でならない。来年はきちんとアクション・リサーチを行って授業研究の論文が書けるようにしたいと考える。

(21389字)

## 制作資料

授業見学に関する事前調査のお願い	p.19
英語とコミュニケーションに関するアンケート	p.21
授業観察シート 基本情報シート	p.22
授業観察シート 授業中シートその____	p.23
授業観察シート 非構造化インタビューシート	p.24
授業の振り返りアンケート	p.25
対教師事後インタビューシート	p.26
COLTの分類	p.28
「(単元名)に関するアンケート」	p.29

●●学校 ●● ◆◆先生

## 授業見学に関する事前調査のお願い

慶應義塾大学総合政策学部2年  
遠藤 忍

今回は、授業見学へのご協力をいただき、ありがとうございます。見学当日に見せていただく授業の内容について、以下の質問にお答えいただきたく思います。なお、決まっていない部分は、ご記入いただく必要はありません。なお、いただきました情報は、観察記録をスムーズに行うために、観察シートに事前に記入をしておくこと以外に、使用することはありません。

1. 今回見せていただく授業では、どのような活動を行いますか？

2. 指導の中心となる内容（文法事項・表現など）は何ですか？

3. 今回の活動は、主たる教材(教科書)の内容に準拠したものでしょうか？  
それとも独自のカリキュラムですか？

(教科書準拠の場合、書名と単元名をお願いします。)

4. この活動／単元を取り扱うのは何回目ですか？

\_\_\_\_\_回目 ・ 初めて

5. 主たる教材以外に授業に用いる教材はありますか？ ある場合はご記入願います。



# 英語とコミュニケーションに関するアンケート

慶應義塾大学総合政策学部2年 遠藤忍

初めまして。慶応大学2年の遠藤忍と言います。

大学で、英語教育について研究をしています。今回、英語とコミュニケーションに対する意識の調査をすることになりました。以下のアンケートにご協力をお願いします。なお、書いていただいたことは、研究以外では利用せず、また担当の先生にこの用紙を直接見せることはありません。

1. 名前を書いてください(書きたくない場合は結構です)\_\_\_\_\_

2. あなたは、英語が好きですか? はい ・ いいえ

3. 英語の授業で楽しいと思うこと・つまらないと思うことは何ですか?

楽しい	つまらない

4. 次 a~d のことばで、あなたは5~1のどれに当てはまりますか?

【5:強く思う 4:思う 3:どちらでもない 2:あまり思わない 1:全く思わない】

a 英語を書けるようになりたい: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

b 英語を読めるようになりたい: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

c 英語を聞けるようになりたい: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

d 英語を話せるようになりたい: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

5. 次の a~d のことばで、あなたは5~1のどれに当てはまりますか?

【5:強く思う 4:思う 3:どちらでもない 2:あまり思わない 1:全く思わない】

a 友人と話すのが好き : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

b 年上の人と話すのが得意 : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

c 初対面の人と気軽に話せる: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

d 外国人と話することができる: 5 - 4 - 3 - 2 - 1

質問は以上で終了です。ご協力ありがとうございました。  
アンケートのお問い合わせは、s07154se@sfc.keio.ac.jpまで

授業観察シート 基本情報シート

観察者：遠藤 忍	観察日時：      年    月    日 :            ~            :
担当教師名：	授業場所：
授業の対象：	クラスサイズ：            名 うち男子            名 女子                名
主要教材と該当箇所：  p  この単元は今回が 初めて・ _____ 回目	補助教材リスト： ・ ・ ・ ・ ・
本授業の目的・目標（事前）	大まかに、何をするのか（事前）
教室の配置	クラスの雰囲気メモ（主観）

授業観察シート 授業中シートその\_\_\_\_

観察者：遠藤 忍	観察日時： 年 月 日
現在の活動内容：	
上記以外の場合は記入：	
現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 - 全体共有 - _____	
活動内容を更に詳しく：	
主観メモ	発言メモ

授業観察シート 非構造化インタビューシート

インタビュー① 男子・女子	インタビュー② 男子・女子
インタビュー③ 男子・女子	インタビュー④ 男子・女子



# 授業の振り返りアンケート

慶應義塾大学総合政策学部2年 遠藤忍

今回は、皆さんの授業を見学させていただき、ありがとうございました。今日の授業を自分自身で振り返って、以下のアンケートに記入をお願いします。なお、書いていただいたことは、研究以外では利用せず、また担当の先生にこの用紙を直接見せることはありません。

1. 名前を書いてください(書きたくない場合は結構です)\_\_\_\_\_

2. 今日の授業で楽しいと感じたこと・つまらないと感じたことを書いてください。

楽しい	つまらない
-----	-------

3. 今日の授業で、できたこと・できなかったことを書いてください。

できた	できなかった
-----	--------

4. 今日の授業を通じて学んだことは何ですか？

5. 次a～dのことばで、あなたは5～1のどれに当てはまりますか？

【5：強く思う 4：思う 3：どちらでもない 2：あまり思わない 1：全く思わない】

a 先生の説明がよく分かった : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

b 自分から英語を使ってみた : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

c 友達と積極的に話してみた : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

d またこういう授業をやりたい : 5 - 4 - 3 - 2 - 1

質問は以上で終了です。ご協力ありがとうございました。  
アンケートのお問い合わせは、s07154se@sfc.keio.ac.jpまで

対教師事後インタビューシート その1

教師名：	日時： ____年__月__日
実施場所：	____：____～____：____
Q 1 授業後の感想を聞かせてください。うまくいったか否かでは、どちらでしたか？	
Q 2 生徒たちは、指導内容を理解することができたと思いますか？	
Q 3 当初の到達目標は達成されたと思いますか？	

Q 4 事前に計画・意図した通りに授業は進行了ましたか？

Q 5 生徒の授業態度や活動意欲、授業中の反応についてどう思いましたか？

Q 6 今回の授業内容をふまえ、次回授業はどのように実施しようと思えますか？

<COLTの分類<sup>15</sup>>

Part A：教室の出来事

①活動の記述

②授業構成

- A. 全体の構成 ①教師の発言 ②学習者の発言 ③一斉練習
- B. グループ学習 ①同一の課題 ②個別の課題
- C. 学習者個人の学習
- D. BとCの混合

③授業内容

- A. 運営／進行 ①方法の説明や指示 ②注意や叱責
- B. 外国語の説明 ①形式 ②機能 ③談話 ④社会文化的要素
- C. その他活動 ①挨拶・出欠 ②ショート・トーク ③議論や意見
- D. 主題の設定

④学習者の活動

⑤教材・教具

- A. 種類 ①読み物（単文/物語） ②聴覚教材 ③視覚教材
- B. ソース ①付属教材 ②付属教材以外
- C. 使用法 ①単一目的 ②複数目的

Part B：コミュニケーションの要素

①目標言語の使用

- A. 母語の使用 B. 外国語の使用

②インフォメーション・ギャップ

- A. 情報要求 ①タスク ②実際に必要
- B. 情報提供 ①予測可能 ②予測不可能

③会話練習

- A. 1語 B. 1文・1節 C. 2文以上

④教師の反応

⑤対応・訂正

- A. フィードバック無し B. 反復 C. 言い換え・置き換え
- D. コメント・意見の表明 E. 拡張・情報提供の指示

⑥学習者の自主的発話

⑦言語活動の種類

- A. 変形などの練習 B. 簡単な応答練習 C. 自由発話、発表

<sup>15</sup> 中森：2000の文章中より引用

## 「(単元名)」に関するアンケート

慶應義塾大学総合政策学部2年 遠藤忍

こんにちは。この前、授業を見学させてもらった慶応大学2年の遠藤忍と言います。皆さんが今回の「(単元名)」を通じてどんな変化があったか、調査しています。以下のアンケートにご協力をお願いします。なお、書いていただいたことは、研究以外では利用せず、また担当の先生にこの用紙を直接見せることはありません。

1. 名前を書いてください(書きたくない場合は結構です)\_\_\_\_\_

2. あなたは、「(単元名)」を通じて、何を学びましたか？

3. あなたが「(単元名)」を勉強する前と後で、変化したことがあると思いますか？

4. 次a～dのことばで、今のあなたは5～1のどれに当てはまりますか？

【5：強く思う 4：思う 3：どちらでもない 2：あまり思わない 1：全く思わない】

a 英語を書けるようになりたい： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

b 英語を読めるようになりたい： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

c 英語を聞けるようになりたい： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

d 英語を話せるようになりたい： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

5. 次のa～dのことばで、今のあなたは5～1のどれに当てはまりますか？

【5：強く思う 4：思う 3：どちらでもない 2：あまり思わない 1：全く思わない】

a 友人と話すのが好き : 5 — 4 — 3 — 2 — 1

b 年上の人と話すのが得意 : 5 — 4 — 3 — 2 — 1

c 初対面の人と気軽に話せる： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

d 外国人と話すことができる： 5 — 4 — 3 — 2 — 1

質問は以上で終了です。ご協力ありがとうございました。  
アンケートのお問い合わせは、s07154se@sfc.keio.ac.jpまで

## 参考文献

- ・ 佐野正之・奥山竜一・酒井善久・宇喜多宣穂・中森誉之. 2000. 『アクション・リサーチのすすめ——新しい英語授業研究』 英語教育21世紀叢書. 東京：大修館書店.
- ・ 森田昌美. 2004. 『現職者研修としての「授業見学」—その有効性と問題点—』 「ドイツ語教師トレーニングプログラム ドイツ語教員養成-研修——外国語としてのドイツ語教育」 日本独文学会研究叢書028. 日本独文学会.
- ・ 牛野未奈子. 2006. 『日本の高等学校における英語読解指導に関する研究：教科書分析と授業観察から見る一考察』 慶應義塾大学院修士学位論文. 神奈川：慶應義塾大学.
- ・ K・ジョンソン, H・ジョンソン編. 1999. 『外国語教育学大辞典』. 東京：大修館書店